

オットーは「ギター」が禪と違う所はその有神論であると
し、また敬虔主義もそこに認める。さて大峽はファウスト講師
の手を借りて、禪宗史を加えたこの書を帰国二年後(一九二五)
に出版した。謝辞にはハイデルベクのH・リツケルト教授や
マールブルクのオットー博士、友人のE・ヘリゲル等の名が挙
がっている。ヘリゲルは東北大学の哲学科外人教師として仙台
に赴任し、弓道を仙台で習って『弓と禪』(*Zen in der Kunst
des Bogenschießens*, 1948)の和訳がある書を残した(「禪」
は遺稿)。夫人は生け花と墨絵を習い、『生け花の道』が同じ稲
富・上田訳で出たという。大峽は始めに中国禪宗史を概論し、
年表を付けて六十頁に及ぶ。それから信心銘と証道歌に引き続
き無門関と碧巖録、白隠の著語を含む五位頌、十重禁戒、そし
て難透としての葛藤集の四則を、註付きでドイツ語訳した。

第十四部会

京鹿子娘道成寺における

聖なる女性についての一考察

東本 早紀子

「京鹿子娘道成寺」とは、有名な歌舞伎演目の一つである。
宝暦三年(一七五三)三月、初世中村富十郎が、江戸下り初御
目見得として初演した。歌舞伎の「京鹿子娘道成寺」は、能の
「道成寺」を下敷にして創作された作品であり、それぞれ、道
成寺説話の後日譚である。歌舞伎と能は、日本の伝統的な舞台
芸能であり「道成寺もの」と呼ばれる共通した物語である。し
かし、両者を比較した場合、物語の主人公・清姫のイメージが
対極的に設定されているという点に大きな違いが見られる。歌
舞伎において物語の主人公・清姫は、聖なる女性の顕現である
のに対し、一方、能において清姫は、悪しき女性として描かれ
ている。「道成寺もの」の発端となった道成寺説話には、平安
時代中期の「本朝法華験記」「今昔物語集」、鎌倉時代の「元亨
釈書」、続いて室町時代の絵巻「道成寺縁起」などがあげられ
る。これらの物語には、それぞれ登場人物や描き方に若干異な
る部分は見られるが、共通した物語である。そして、道成寺説
話の後日譚である歌舞伎の「京鹿子娘道成寺」と能の「道成寺」
も共通した物語である。しかしながら、能から歌舞伎に創作さ

れた際、物語の主人公・清姫のイメージは、悪しき女性から聖なる女性へとイメージチェンジがなされている。では、この物語において、主人公のイメージチェンジをすることに成功した要因は何なのか。また、当時の観客はどのような主人公のイメージを求めていたのか。本発表では、当時から現代にかけての日本人のもつ宗教性や思想の側面について、聖なる女性に焦点をあて考察していく。

紀州道成寺には、釣鐘にまつわる古くから伝わる有名な伝説があった。それは、時は永長六年(九二八年)のこと。紀州国日高郡に住む真那古庄司の娘の清姫は、庄司の家に一夜の宿を借りた熊野詣の若い僧の安珍に思いを寄せる。そして、二人は夫婦になる約束を交わすが、僧は立ち去ってしまう。その裏切りを知った清姫は、嫉妬のあまり、ついには蛇体となって逃げた僧の後を追ひ、道成寺の釣鐘の中に隠れた恋しい僧を鐘ごと焼きつくし、自らも息絶えてしまう。その後、二人は畜生道に落ちたが、高貴な僧の写経によって救われ、別々に天へと昇った。法華経とは有り難いものである。これが道成寺説話である。この伝説に基づいて、その後展開された物語が、能の「道成寺」と歌舞伎の「京鹿子娘道成寺」である。清姫のために焼失していた紀州道成寺の釣鐘が、正平十四年(一三五九年)に再興した。そこへ清姫の亡霊が、白拍子花子(中世の女芸人)に扮して現われ、鐘供養の妨害をしたという物語である。すなわち、清姫は、鐘への恨みをはらすべく、鐘供養が行われる日に、紀州道成寺を再び訪れ、再興された鐘を崇った物語、「道成寺」である。

能と歌舞伎で共通して見られるのは、第一に、清姫が僧の禁欲生活を脅かす存在の女性として描かれており、第二に、女性の普遍的な苦しみとしての嫉妬が鐘を媒体に表現されている。そして、第三に、恋に一途で健気な女性として描かれているという点である。しかし、共通した物語であっても、能と歌舞伎を比較した場合、物語、舞台構造、衣裳によって観客に与える物語の主人公のイメージは大きく変化する。結論として、歌舞伎だからこそ、清姫を聖なる女性として描くことに成功したのである。なぜなら、能は抽象的表現であるのに対し、歌舞伎は能の抽象的な要素を含みつつ、写実的表現だからである。この「京鹿子娘道成寺」に即して言う限りでは、物語の主人公・清姫の表現は、鐘への執念だけに止まらない。女・蛇・聖が、女性として生きることへの情念として繋がっているのである。それは、歌舞伎舞踊によって、聖なる女性の表現が更に強調される。そこで観客は、本当の自分の姿を主人公の中に投影し、想像の世界に自身を解放しているのである。

宗教における「女」の伝統

——天理教婦人会についての一考察——

堀内 みどり

「一時女、婦人会として始め掛け。これ人間が始め掛けたのやない。神が始めさせたのや」(明治三二年三月二五日)との神意(「おさしづ」…明治二〇年から四〇年にかけて、本席飯降伊